〔共同研究：現代世界の政治・経済における統合と分化の研究〕

中国東北（満州）における二つの記念館と三人の日本人烈士

勝　部　　元

少し話は古くなるが，昨81年8月8日より8月19日まで，北京，大連，瀋陽，長春，哈爾浜北京と旅行してきた。一行19名，主として戦前満鉄調査部に籍をおいていた長老，先輩たちから構成されていた。わたくしもまた昭和15年3月に，大学を卒業するとすぐ，満州重工業調査部に就職し，約2カ年間長春（新京）で過したことがあるので，思い出の地がどうなっているのか，生きているうちにたづねてみたい思いを抱いていた。また約10年程前から，日中友好運動にたずさわって以来，73年，78年と訪中し，北京，上海，広州等を訪れて日中人民の友好交流をふかめるとともに，中国の実状についていささか学んできた。この度戦後三回目の訪中によって，年来の希望をみたされるとともに，中国のあまりの変化の激しさに驚いたり，感嘆したり，失望したりしたが，この問題については，今ここではふれない。

ぜひ記録を残しておきたいと思って筆をとったのは，日・中交流史の中で，われわれ日本人がどうしても忘れてはならない原点と考えられる二つの記念館のことである。

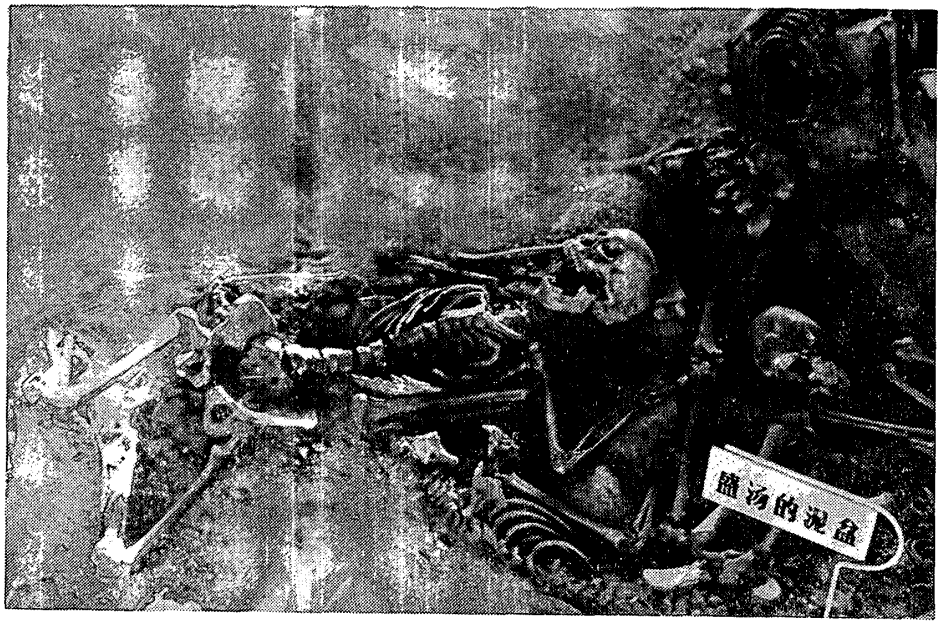
同行の野間清愛知大学教授がすでに「東北地区の『二つの記念館』——東北地区旅行印象記」という題名で中国研究所の「中国研究所月報」(1982年3月号）に書いておられるので，屋上屋を架するようだが，わたくしはわたくしなりにぜひ書き残しておきたい。

記念館の一つは炭鉱の町撫順のすぐそばの平頂山にある「平頂山殉難同胞遺骨館」である。侵略者日本帝国主義の軍隊が，如何に非人道的大虐殺（ホロコースト）を行なったかは，この記念館を訪れるなら痛烈に文字どおり身にしみて理解できる。

現在，復活した日本帝国主義の手先たちが教科書を改ざんし，如何に「進攻」「進出」というようなマヤカシの言葉でいいくるめようとしてもこの記念館に足を一歩でも踏み入れるなら，あらゆるゴマかしが一遍に吹っ飛んでしまう。日本帝国主義の侵略の爪あとのすさまじさは訪れる日本人をうちのめし，冷汗と涙なしには立ち去れない。「アウシュヴィッツ」はここにあった！しかも手を下したのは同じ日本人である！

事件は日本の侵略の開始された9・18（柳条湖）事件の翌年の1932年（昭和7年）9月16日におこった。9月15日仲秋節の日，抗日パルチザンである遼東地方の民主抗日部隊が800軒の家屋に約400世帯人口3,000人あまりの農民，炭坑夫の住むこの村落を通りぬけた。翌16日早朝，撫順に駐屯していた日本軍と憲兵隊190名あまりは，この集落を包囲した。そして1軒残らずしらみつぶしに捜索し，銃剣をつきつけて老，若，男，女をとわず全員を集落の向い側の崖下に集めた。そして800軒の家屋に火をつけて焼きはらった。また集った村民に対しては小銃とピストルと機関銃で一斉射撃を加えた。弾丸で生き残ったものに対しては，銃剣で刺殺したり，台尻で撲殺した。そしてその死体の山に石油をかけて焼き，ダイナマイトで崖を爆破し，崩れた土砂の下に死体を埋め，犯罪の痕跡を消し去ろうとしたのである。解放後1951年に死体は掘りおこされ，山頂に平頂山殉難記念碑が建てられた。さらに1969年約800体の遺骨を掘り出しているうちに当時の状況を伝える遺骨の層にぶつかった。そこでその下に数百体の遺骨を残したまま，天井の高い建物をたて，この「殉難同胞記念館」を建設したのである。

館内に一歩踏み入れると累々たる約800体の遺骨の群，また群が当時のままの状況を再現している。われわれはショックで到底正視できない。案内の女性が声をふるわせて説明する。



平 頂 山 殉 難 同 胞 遺 骨 館

「これは子供の遺骨です。小さな腕輪が手首に残ったままになっています。多分10才にもなっていなかったでしょう。」

「あの標識のところにあるのは生後何日もたっていない生れたばかりの嬰児の遺骨です。むつきに包まれたままです」

「ここにあるのは一番上の遺骨は男子，真中は女子，その下は子供の骨です。多分父，母，子供の一家が全部虐殺されたあとです」

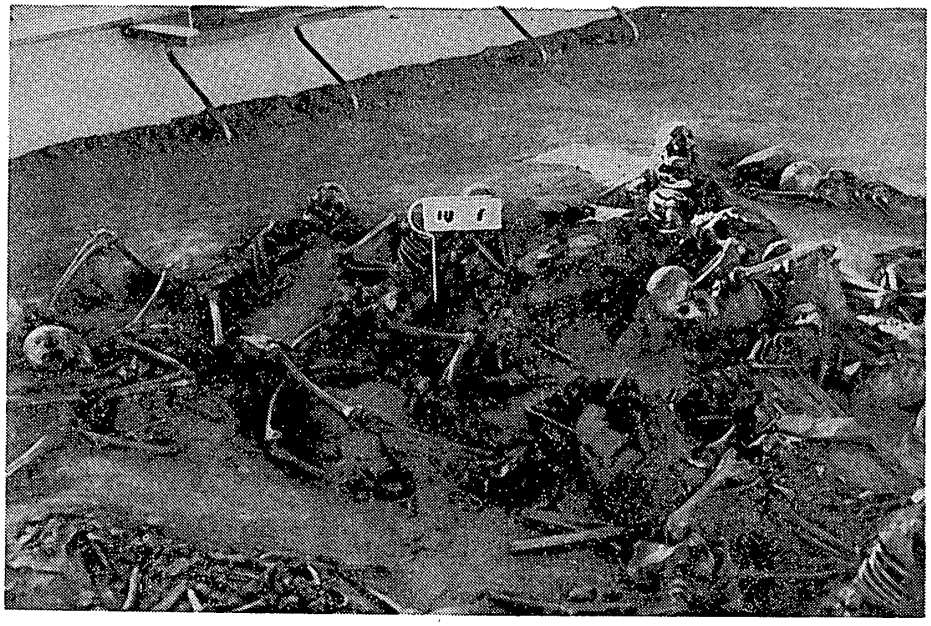
「これは母親が子供をだきかかえたままの殺されたあとです。」

「この遺骨には赤いしるしをしたところに軍刀で切られたあとが残っています。」

「こちらの遺骨の間に見えていますのは，月餅と落花生です。みなさん御承知のように中国人は仲秋節には，月餅を食べ家族そろって楽しみます。茶碗に入っているのは高粱の御飯です。仲秋節を祝った残りを子供に食べさせようと親が持ち出したのでしょう。遺体の衣服や石油缶の陰になって偶然焼けのこったのが掘り出されたのです。」

こういう惨たんたる大量虐殺の生々しい現場に直面すると，われわれはうちのめされ息がつまって言葉は出ない。「悪いのは日本軍国主義で日本国民もまたその犠牲者です。」といわれていい気になっていた自分の心臓がギューとつかみとられたような気がする。

いままでお題目のように「子々孫々にわたる日中人民の友好」を唱えてきたが，理論的にはその通りかも知れないが，それが何と白々しいかという思いにかられる。もし立場が変ってわ



れわれ日本人が，「殺される」側に立ち，自分の親，兄弟姉妹，夫，妻，子供にたいしてこのような大虐殺が加えられたら，どうだろう，という思いが重く心にひっかかる。どうして無神経に派手な慰霊祭を現地でやったり，37年間も育ててくれた中国の養父母の感情や恩も義理も無視して孤児対面劇をマスコミが演出したりできるのだろうか。わたくしは慰霊祭をやるな，というのではない。肉親探しがけしからぬ，というのでもない。開拓民の人々もまた日本の極貧農として，日本の支配層にだまされ，敗戦とともに東北の荒野に置き去りにされ，敗戦の重荷と悲劇を一方的に背負わされてきた人々である。しかし中国の農民にとっては，かれらもまた自分たちの土地を奪い，さらに自分たちを抑圧・虐殺した鬼畜の片われである。

真の日・中友好のためには，日本人のやったこのように犯罪行為をはっきりと見定め，深く反省することから出発しなければなるまい。*

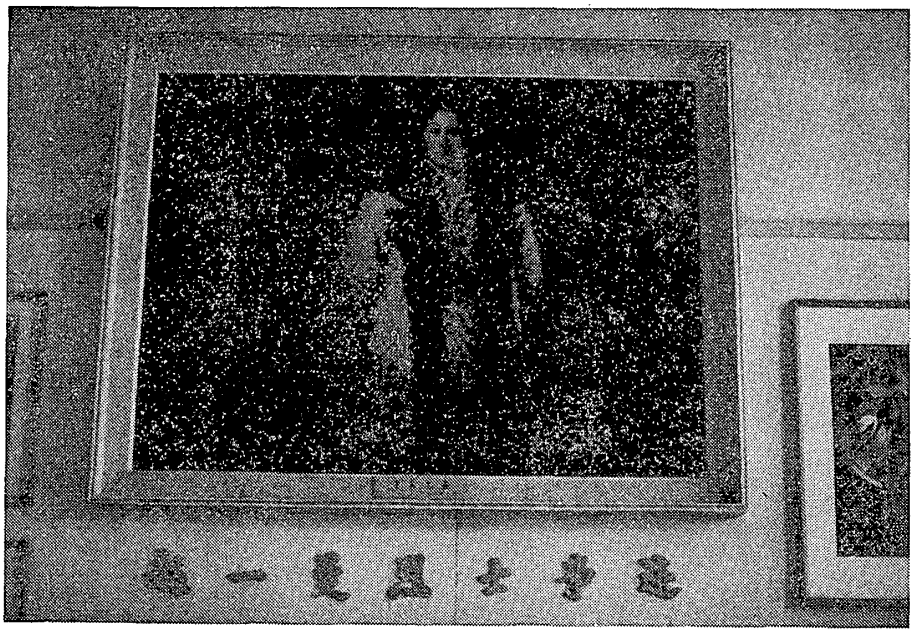
* このような大虐殺のあとは，「万人坑」として日本人経営の鉱山や工場の附近には沢山ある。（本多勝一「中国の旅」参照）また日本軍の「三光作戦」（殺しつくし，焼きつくし，奪いつくす）についても若干の報告はある（神吉晴夫編「三光」光文社昭32年カッパブックス参照）

平頂山で，わたくしたちは，日本帝国主義が中国で行なった犯罪行為・大虐殺に胸をしめつけられるような思いをしたが，ハルピン市の「東北烈士記念館」では，別の意味で感慨無量だった。平頂山の説明員がいっていた毛沢東の言葉――「すべての反動派は，大量殺戮という方法で革命を滅ぼそうと企む。かれらは，人々を沢山殺せば殺すほど革命は滅ぼせると考えている。しかしこのような反動派の主観的な願望とは反対に，実際には反動派が人々を殺せば殺すほど，革命の力は大きくなり，反動派はますます滅亡するのである。これは拒むことができない法則である。」が実証されていた。東北の中国人民は立ち上り，武器らしい武器もなしに，ほとんど徒手空拳で日本軍と偽満州国軍にたいするすさまじい抗日抵抗斗争を行なっていたのである。

東北烈士記念館は，1948年，ハルピン市南崗の旧警務庁特務科の建物をそのまま利用して建てられた。ここには戦争とそれに続く解放戦争期にその生命を革命にささげた烈士たちのうち抗日戦期の109名，解放戦期の108名の写真，経歴，遺品が展示されている。1953年1月，周恩来総理はわざわざこの記念館を参観し，花環を献じた。館の入口には墨痕鮮やかな周総理の「革命先烈永世不朽」という題詞が掲げられている。また毛沢東，朱徳，郭沫若の題詞もかけてある。説明員は，驚くほどねばり強く抗日の斗いを続けた英雄たちの業績を声高らかに説明してゆく。わたくしにとってとりわけ感銘深かったのは有名な伝説的抗日英雄楊靖宇と越一曼の最後の模様だった。1940年1月密林の中で最後の斗争を続ける「靖宇同志は，密林の中で五昼夜にわたって奪戦し続けたが身辺にわずかに残っていた二名の戦士も相ついで戦死していった。靖宇同志も身に数カ所の傷をうけ，その上食料を一粒も口にせず幾日にもわたって馳けまわり，飢えと寒さでほとんど精も根も力もつきそうになっ

東北烈士記念館・周恩来の献詞

東北烈士記念館・楊靖宇の像



東北烈士記念館・趙一曼

ていた。しかしそれでもなお頑強に力をふりしぼり，戦いながら東に進んでいった。そして2月23日の午前靖宇同志は，濛江県保安村西南の三道歳子にたどりついた。追跡してきた100名をこえる日本軍とカイライ軍は，遠くの者でも100余メートル，近くのものは2，30メートルの近くまで大声をあげながら迫ってきた。靖宇同志は，恐れることなく，樹を盾にして，両手で拳銃をうち，頑強に抵抗し，近づく20余人の敵を殺し負傷させた。敵は大声で叫んだ『武器を捨てろ。殺しはせぬ，安楽な暮しが出来るぞ』。靖宇同志は，さげすみの笑みを浮かべ，怒りの眼をつり上げ，身をのり出して叫んだ。『最後の勝利は中華民族のものだ』と。そして射撃の手をゆるめず敵を寄せつけなかった。日本軍将校の一人がとうとう機関銃での応射を命令した。靖宇同志は全身に散弾をうけ壮烈に国に殉じた。時に35才であった。」（干葆林）壮烈な愛国烈士の死にざまである。かれは首をはねられ，腹をさかれた。胃の中には枯草と木皮と綿の繊維だけで，一粒の穀物もなかった，という。

りりしい抗日女性英雄趙一曼の像と子供たちに残した彼女の遺書も壮絶で深くわたくしの心をうった。日本軍にとらえられ処刑の場に送られる彼女はつぎのような遺書を残している。

「寧児（ニイアール）よ

母はお前を教育する責任を果すことが出来ませんでした。これは本当に心残りです。

母は反満抗日斗争のため力をつくしてきたので，今日まもなく犠牲となることになりました。

わたしとお前とは生きてはもう永久に会える機会はありません。寧児（ニイアール）よ　少しでも早く大きくなってお前の地下に眠る母親を慰めて下さい。

わが愛する息子よ，わたしは千万言の言葉を使ってお前を教育する必要はありません。実際の行動によってお前を教育するのだから。

お前が成人してからのち，お前の母親が国のため処刑になったことを決して忘れないで下さい。

1936年8月2日　母趙一曼　車上にて」

ボリビアに旅立つさいに愛児たちに残したチェ・ゲバラの遺書と並んで，切々として心うたれる遺書であった。今日人民中国が誕生するまで，このような膨大な犠牲と不屈の斗いがどれほど重ねられたことであろう。この記念館で「東北烈士記念館解説詞」81年4月，「東北烈士記念館」抗日戦争部分箇介（1978年）同解放戦争部分箇介（1978年）というパンフレットとともに284ページもある黒竜江省社会科学院北方党史研究所，東北烈士記念館編「東北烈士伝」

第一輯黒竜江人民出版社1980年ハルピンを入手することができた。

この第一集は，羅登賢，楊林烈，金伯陽，楊靖宇，李紅光，曹国安，童長栄，王徳泰，侯国忠，金順姫，郝貴林，趙一曼，李福林，李秋岳，何忠国，楊太和，傅顕明，干洪仁，李光林，夏雲傑，張傳福，陳栄久，張文偕，鄧鉄梅の24名について，かなりくわしい伝記が掲載されている。そして第二，第三集も1981年にひきつづき刊行されている。

わたくしたちより約一カ月前に通化や濛江県，請宇県をのぞいてほとんど同じコースを取材旅行に歩かれた沢地久枝氏はこの東北烈士記念館でこの「東北烈士伝」にはふれずパンフレット以外入手できなかったと書かれている(「文芸春秋」82年2月号292ページ，「もう一つの満州」文芸春秋社223ページ）のにはちょっと奇異な感じがした。もっとも新刊の書物の方ではどうやらこの本を入手されたらしく鄧鉄梅についてはこの本を引用されている。(59ページ)この第一級資料である「東北抗日烈士伝」第一輯は，現在野間教授の下で翻訳が完了し出版の準備中である。

ところで，この館に陳列してある烈士たちの説明をつぎつぎ聞いて歩いているうちに，すばらしいものにぶつかった。プロレタリア国際主義の模範として3人の日本人の事績が展示してあったのである。

1人は伊田助男――かれの具体的な名前は知らなかったがコミンテルン第7回大会で中国代表王明の報告の中に引用され，前々から調べたいと思っていた人物であった。もう1人は，医者の佐々木源吾。カナダのベチューンのことはよく知られているが，日本人にも同様の国際主義者がいたことは，始めて教えられた。第三の人物は，緑川英子(長谷川テル)。この人についてはさいきんではかなりよく紹介されている。

そこで以下この3人について，わたくしの入手した資料を中国語に堪能な知人(川俣優氏)にたのんで翻訳してもらい，以下にかかげておく。今後の日・中関係史の歴史的研究の資料として少しでもお役に立てば幸甚である。

なお瀋陽では野間清教授の斡施で，遼寧大学の関捷，章任鴻，孫克復，李桂山，遼寧省社会科学院の張金堂，瀋陽師範大学の劉樹泉氏ら日本研究学者と対談し，80年10月に発足したばかりの，東北地区中日関係史研究会について説明をうけた。この研究会は，東北地区と中国全土の180以上の機関の研究者をふくみ，古代，近代，現代，戦後について日本の研究者も参加して80年10月，81年8月，学術研究集会を行ないその成果を発表している，とのことであった。(簡単な研究テーマについては「通信」が出ている）ので付記しておく。

伊田助男

李　延禄

伊田助男，これは一人の異国の戦友の名前である。この名前は金で鋳造されたもののように，私の心の中にいつまでも，燦然と輝いている。しかし，今でも，彼が中国を侵略した日本軍の鱉剛村一旅団の一兵士であることを知っているほかは，彼について私は何も述べることができない。

その頃，東満の数十万の旧軍隊が改称された自衛軍，救国軍は，日本軍の“討伐”に堪えきれず，ある部隊は逃亡したり，又ある部隊は壊滅したりしてしまった。1933年春，東満の抗日の情勢を挽回するために，党は我々に，わが党が掌握している1000余の救国軍残存部隊をすみやかに，当時の赤区の中心，馬家大屯に移動させ，“抗日救国遊撃軍”と改称するよう指示してきた。敵軍は少しも手をゆるめず，ただちに救国軍討伐の主力を移動させ，又，延吉・和竜・琿春・汪清4県の3000余の日本軍を糾合し，鱉剛村一の指揮により，我々のすぐ背後を追撃してきた。3月30日，馬家大屯一帯で，戦いの火ぶたは切って落とされた。

払暁から黄昏まで，敵軍は休みなく飛行機や大砲により，孤独山を猛攻してくる。孤独山に包囲されたわが軍の一部は，弾薬を使い果してしまったが，敵軍は依然として絶え間なく突撃する。硝煙のたちこめる中，孤独山からはしきりに，我々に向かって，弾薬の補充を頼む手旗

信号が送られてくる。どこに弾薬があるだろうか！　我々は本当に焦った。

敵軍の最後の攻撃が退けられ，夕方になって孤独山を撤退していった。我々はただちに各部隊に，この機会を利してすみやかに戦場へ銃弾を片付けに行くよう命令した。

夜半過ぎ，前線から報告が送られてきた。部隊が嘎牙河下流の大肛子川で戦場を片付けていると，うっそうたる松林の中で，1台の日本軍の自動車が発見され，その中に歩兵銃と弾薬が満載されている，ということだった。これはどんなに人々の心を奮い起こす知らせであったことか！　弾薬だ！　我々はいつも，こんな大量の弾薬が手に入いらないかと思っていたので。

弾薬はすみやかに運ばれてきて，各戦闘員の手に配られた。十分な弾薬を手に入れ，我々の重く沈んだ心も落ち着いてきた。払暁，私は各陣地を視察した。戦闘員はちょうど，犠牲になった戦友を陣地からかつぎ下ろし，埋葬の準備をしていた。私は烈士達の遺体の前に立ち，黙ってひとりひとり確認していった。遊撃隊の同志もいたし，赤区の大衆もいた。ひとりひとり見ていくうちに，私は思わず茫然とした。烈士の遺体の中に，意外なことに一体の日本兵の遺体が横たわっていた。

「なぜ，彼を運んで来たのだ」と，私は尋ねた。

隊長の李光同志がこう言った。「軍長，彼は我々の同志なのです。この車の弾薬は，彼が我々に送ってくれたのです」言いながら，ポケットの中から1枚の紙切れを取り出し，私に手渡した。その紙にぎっしり書き込まれた日本の文字を見ると，私はますます訳がわからなくなった。

李光同志は，次のように言った。彼が部隊を率いて，松林の中でこの自動車を発見した時，自動車のエンジンは破壊されていた。その時，彼もまったく訳がわからなかった。どうして敵軍は，この車を引っぱって行かず，破壊してしまったのだろうか。彼らが松林を離れ，さらに前方を捜索した時，嘎牙河のほとりで一体の日本兵の死体を発見した。この死体からわずか10数歩の所に，1枚のノートからひきちぎられた小さな紙切れが，石の下に押さえられていた。そう，この紙切れである。

私はさっそく日本語のわかる同志を捜し出した。読んでみると，紙切れには次のように書かれていた。

親愛なる中国の遊撃隊の同志達へ

私はあなたがたが谷に撒いた宣伝物を見て，あなたがたが共産党の遊撃隊であることを知りました。あなたがたは愛国者であり，国際主義者でもあります。私はあなたがたと会って，ともに共同の敵を打ち倒すことを強く願っておりました。しかし，私はファシストに包囲されており，道はふさがれています。私は自殺することにしました。私の運んで来た10万発の弾薬を，貴軍に贈ります。それは北側の松林の中に隠してあります。どうか，日本のファシスト軍をよくねらって射って下さい。私の身は死んでも，革命の精神は滅びません。神聖なる共産主義の事業が一日も早く，成功することを祈ります。

関東軍間島日本輜重隊　日本共産党員　伊田助男

1933年3月30日

ある巨大な尊敬の念が私の心に湧き上がって来た。周囲の遊撃軍の兵士達も，伊田助男同志の遺体のまわりに集まって来た。涙が次から次へと，人々の頬に伝わった。私は身をかがめて，伊田同志の遺体に近づいた。目は安らかに閉じられ，真黒な眉毛はぴんと伸び，顔中の鮮血と泥も彼の荘厳な遺容を毫も損うことはできなかった。我々は次々と彼の手を握り，そっと呼びかけた。『伊田助男同志！……』

彼は静かに横たわっていた。まるで生きているかのように思えた。彼の心臓は依然として躍っている――それは国際主義の心だ。中日両国人民が永遠にともに存ることを宣していた！

我々は伊田助男同志の遺体と遊撃軍烈士を，ともに静かな青山緑谷の中に埋葬した。彼と中国の抗日英雄達を，ともにこの土地で永眠させるのだ。

3日後，遊撃隊の同志と馬家大屯の大衆は，伊田助男同志の墓前で追悼会を行った。さらに，馬家大屯小学校を“伊田小学校”と改称し，中

華民族解放のために自らの年若い命を献げた，この日本共産党員を永遠に記念することにした。

伊田助男事件の発生後，日本の特務機関は鱉剛旅団内部で大捜索を行った。まもなく，この部隊は延吉に移動させられ，すっかり解体され，将兵は各地に“思想矯正”に送られた。10万の弾薬によって，我々は困難な情勢から脱出することができた。我々は伊田同志を永遠に記念するとともに，この事件を党の上級に報告した。その後，伊田助男同志の国際主義精神は，そのままコミンテルン第7回代表大会の会場に伝えられ，称賛を受けた。

（「星火燎原」第3号戦士出版社 p.416～418）

*同一の文章は李延縁がはじめて，1965年「人民日報」と「解放軍報」に掲載し，「回想記」にも再録され，また姜念東らの「偽満州国史」吉林人民出版社1980年，557—561ページにも要約がのっている。邦訳はかって赤旗に掲載され，要約は中村新太郎「孫文から尾崎秀実へ」日中出版社188—191ページに掲載されている。

わが国解放戦争のために身を献げた日本人医師——佐々木源吾

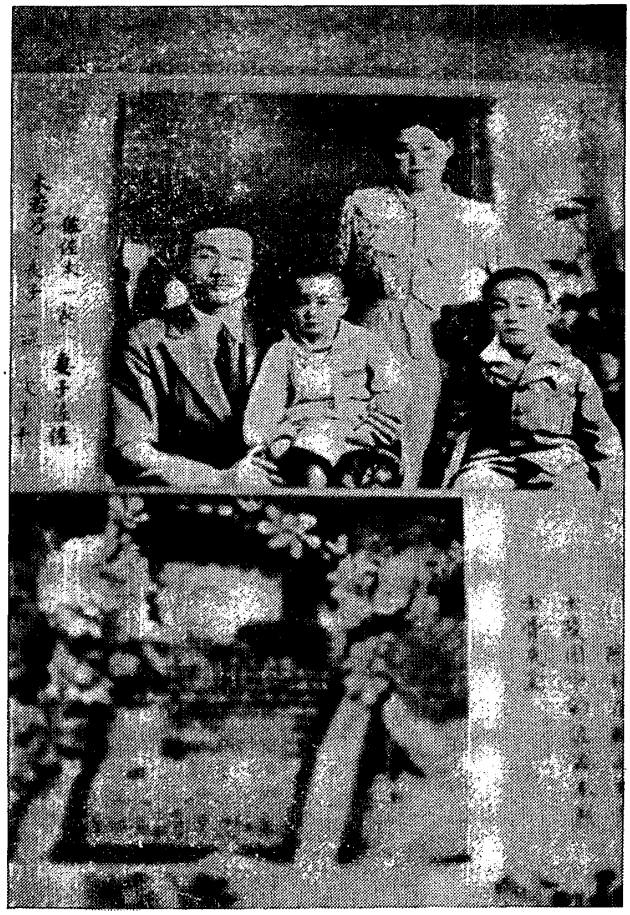
温野

ハルピン市の東北烈士記念館には，日本人医師佐々木源吾の事跡が展覧されている。

佐々木源吾は1902年，日本の北海道稚内市のある労働者の家庭に生まれた。少年時代から家庭が生活困難であったため，ある薬屋に奉公し，働きながら中学を卒業した。1920年に兵役に服し，日本陸軍の衛生兵となり，後に准尉・軍医補佐に昇格した。彼は懸命に勉強して，医学の研讃を重ね，試験を受けて医師の資格を得た。退役後はひき続き医療に従事した。

1940年，彼は日本軍国主義政府によって“開拓団”医師に徴用され，わが国黒竜江省中部の甘南県にやって来た。佐々木医師は正直な人柄で，日本軍国主義の中国侵略に反対していた。まもなく，“開拓団”の団長と衝突し，憤然として団を離れ，熱河省興隆県（現在，河北省承

東北烈士記念館・佐々木源吾



佐々木源吾一家（妻，佐々木若乃，長男一誠，次男千大，1936年日本において）

徳地区内）の倒流水鉱山所の医師となった。彼は常に付近の山村へ赴き，中国人民のために心をこめて診察をし，負傷したり，病気になったわが八路軍兵士を治療したこともあった。そのため，佐々木は日本の憲兵隊の訊問を受け，余儀なく熱河を追われて，本渓・西豊・開原などの地（いずれも遼寧省内）に赴き，自分で診療所を開いて医療を行った。

1945年秋，日本帝国主義は連合国に対して無条件降伏を宣言した。わが八路軍第24旅団第16師団が遼寧省開原県城に進駐すると，佐々木医師は進んでわが軍のために働いた。その年の冬，彼は八路軍へ入隊を志願し，遼北軍区第２軍分区衛生部２所副所長に任命された。佐々木医師はわが軍の医師と薬品の欠乏という困難な状況に直面し，開原県城の日本人医師に八路軍部隊の診療所で仕事をするよう呼びかけ説得した。それとともに，自分が以前診療所を開いていたときのすべての医療機器と抗生物質などの大量の薬品を，すっかり八路軍部隊に献げた。

1946年春，佐々木医師は部隊に従って鄭家屯（現在，吉林省双遼県）に駐とんした。このころ，蔣介石はすでに内戦を発動し，反動派の飛行機が絶え間なく鄭家屯に掃射，爆撃に飛んで来た。国民党の特務も到る所で活動し，反共宣伝を行っていた。軍分区衛生部２所に勤めていた日本人医師のうち，一部の者は動揺し，部隊を離れた。立ち去るとき，佐々木にも八路軍を離れ，国民党に身を投ずるよう勧めた。佐々木は決然として，これらの“勧告”を拒絶し，八路軍に従ってどこまでも行く決意を示した。

その年の夏，部隊は吉林省瞻榆県城（現在は通榆県内）に進駐した。以前，日本の細菌作戦を行った極悪人たちがここで病原菌をまきちらしたため，その頃そこではコレラが流行し，情況はきわめて深刻で死亡者が続出していた。佐々木のいた部隊もコレラに感染した。コレラの蔓延を防ぐために，指導部は隔離室を設けて病人に応急手当を行うことにした。このきわめて危険な仕事に直面して，感染を強く恐れ，遠ざかる医者もいた。ところが，佐々木医師は自ら進んで応急手当の任務を引き受けたいという要求を出した。

隔離室が設けられてから，彼はその病室を守り通した。感染を避けるために，彼は断固としてわが国の若い医療工作者を病室に入いらせなかった。彼は心をこめて皆に，こう言った。

「私は年をとっているから，感染しても恐くありません。あなたがたはみなまだ若い。中国にはあなたがたを必要とすることが沢山あります」

佐々木医師の日夜心をこめた治療と看護のもとに，多くの患者が危機を脱して，生命を守った。ところが，佐々木が逆にコレラに感染してしまった。佐々木の病状は日増しに危うくなった。彼は自分がもう健康を取り戻せないことがわかると，幼ない息子をかたわらに呼び寄せ，中国に留まって八路軍に従って行くよう言い聞かせた。又，彼が死んだら中国の風習に従って，この地に仮葬するよう遺言した。1946年８月18日，佐々木医師は不幸にも職に身を殉じた。ときに44歳であった。

おととしの６月，日本の友人，佐々木夫人・岡一恵が，そのまま中国に留まっていた子息を訪ねて，わざわざ日本からわが国鞍山市へやって来た。そして，鞍山市の烈士陵園へ赴き烈士佐々木を追悼した。岡一恵は家族に会いにわが国を訪れ，鞍山市の関係部門の熱烈な歓迎とねんごろな接待を受けた。こうして中日両国人民の友情のために，新たな一章をつづったのである。（「革命文物」1980年第３号）

中日両国人民の忠実な娘
——国際主義戦士緑川英子を記す

茫茫たる四野は弥(あほね)く黯闇(たんあん)，
歴歴たる群星は九天に麗し。
雪に映りて終(つい)に光，黯遠(はなはだ)しを嫌い，
書を照らして還(ま)た一灯の妍(けん)を喜ぶ。

これは郭沫若同志が39年前に，国際主義戦士・エスペラント学者・日本作家緑川英子に題して贈った七言絶句である。詩には郭老の緑川英子に対する熱烈な称賛の意が満ちあふれている。

緑川英子という名前は，多くの人にとってなじみのないものだろう。しかし，文化界の古い世代の同志たちにとっては，親しい思い出と，

東北烈士記念館・緑川英子・劉仁夫妻

英雄的な戦友に対する懐しい気持ちを呼びさます名前なのである。日本に生まれた一女性緑川は，咲きほこる青春時代を中国人民の解放事業に固く結びつけ，困難と危険，困窮を経て，堅忍不抜の精神で中国人民のために服務し，ついに中国の土地で病死したのである。

彼女の戦友と共に，その戦いの足跡を追憶してみよう。

× × ×

1937年4月中旬，まさに桜の咲き誇る季節であった。日本の横浜港はざわめきで沸きかえり，色とりどりの紙テープが遠くに行く者と送る者との手の中に舞っていた。ただひとり若い女性がぽつんと英国汽船の甲板に立ち，両手には紙テープもなくからっぽのまま，黙って祖国に別れを告げていた。これこそ緑川英子——当時，日本では長谷川テルという名前だった——である。船はゆっくりと出航し，五色の紙テープは散る花びらのように，海面へ舞い落ちていった。陸地が遠く離れ，祖国は遠くへ去っていった。彼女の目の前に広がるのは自由の海であった。年わずかに25歳の緑川英子は，大海原の向こう岸，中国に赴き，彼女の夫の身を尋ね，真理と正義を追い求めようとしていたのである。

長谷川テルは1912年，日本の山梨県のある知識人の家庭に生まれた。1921年，資本主義経済の危機が日本を席捲し，軍国主義者が思想統制を強めたとき，奈良女子高等師範学校に学んでいた長谷川テルは，人類の解放を謀る進歩的な事業に接触しはじめ，エスペラント語を愛した。そして，著名な進歩的作家秋田雨雀を理事長とする日本プロレタリア・エスペラント同盟の進歩的な活動に加わった。日本がわが国の東北3省を侵略した“九・一八”事変の勃発は，長谷川テルに衝撃を与えた。彼女は激しい抗議の意を表わし，そのために日本の反動当局に拘留され，退学処分を受けた。その後，彼女は東京へやって来ると，もっぱらエスペラント語の普及に従事し，その翻訳と執筆活動に携わった。彼女は自分の胸に留められた鎌とハンマーの図案のついたエスペラント協会の緑色の徽章をきわめて大切にし，又それを誇らかに思っていた。

ちょうどその時期に，長谷川テルは日本に留学していた中国の青年，劉仁と知り合った。日本軍国主義への反対，進歩の要求と革命への追求は二人を意気投合させた。1936年，中日戦争爆発の前夜，二人は結婚した。それは当時の日本ファシズムが猖獗をきわめた情況のもとでは，大胆な見識と勇気の要る行動であった。

1937年の初め，劉仁は苦難の中国へ帰り，抗

日救国運動に加わった。長谷川テルは本と衣類を売り払い，一台のタイプライターと簡単な荷物を携え，白色テロの日本を逃れた。

中国の土地を踏んでから，彼女は緑川英子という名前を用いた。上海が最初の生活の場所であった。彼女が単身秘密に中国にやって来たのは，たんに愛情への貞節のためだけではなく，より高邁な理想を抱いてのことであった。正義のために，中国人民とともに日本軍国主義に反対し，エスペラント語により中国の民族解放事業のために服務しようとしたのである。

上海で，緑川英子の心臓は中国人民とともに躍っていた。彼女の熱い血潮は中国人民とともに沸き立っていた。彼女は毅然として，上海各界人民抗日デモに参加し，しっかりと中国の姉妹たちの手を握って，ともに高らかに唱った。「起ち上がれ，奴隷の身に甘んじぬ人々よ，われらの血肉をもって新しき長城を築こう……」

“七・七”事変の戦火は上海に燃え広がった。“八・一三”は緑川英子にとって，“驚天動地の一日，血に染まった一日であった”。彼女は日本の侵略者が中国人民にもたらした痛ましい災禍を目撃した。又，中国の兵士と民衆が抗戦へと奮起して次から次へと身を挺して進んで行く壮烈な場面も眼にした。

彼女は《愛と憎しみ》という文章で述べている。“私が日本を愛するのは，それが私の祖国であり，そこに私の両親，兄弟，姉妹，親戚，友人が生きているからだ。彼らに，私は限りない心からのなつかしさを抱いている。私が中国を愛するのは，それが私の新しい故郷であり，私の周りには大勢の善良で勤勉な同志たちがいるからである。私は憎む。全力をもって，今まさに中国人民を惨殺している日本の軍閥を憎む。”

彼女は日本の兵士たちに呼びかけた。“あなたがたの鮮血を無駄に流してはいけません！あなたがたの敵は海を隔てたこちら岸にいるのではありません！　私たちの敵はただひとつ——ファシストなのです”

上海陥落後，緑川英子は郭沫若同志らの援助により，香港・広州を回って武漢へ到着し，中国放送局の対日放送に加わった。

“今，あなたはマイクの前に立って翻訳し，
放送しはじめた，
あなたの同胞に向かって真理を予言する。
あなたのその声は柔かだが，
雷鳴と稲妻を激しく呼び起こす。
あなたの珠玉の言葉は，なお良心をもつ心に献げられる，
あなたの声は無駄にされないだろう，
必ず，あの血迷った，苦しみを生むむごい心をこなごなに打ち砕き，すっかり引き裂いてしまうはずだから”

これはある日本のエスペラント学者が，中国で日本語放送を行っていた緑川英子にその頃寄せた礼讃のことばである。緑川英子は情け容赦もなく，日本侵略者の罪行を暴露し，中国人民の抗日闘争における英雄的な事跡を報道し，投げ槍や匕首のように，日本の侵略者を刺し貫いた。彼らは，これほど流暢な日本語のアナウンサーが一体誰なのか，あらゆる所を探りまわった。武漢陥落後に，侵略者はようやく真相をつかんだ。日本の東京のある新聞が，彼女を“嬌声売国奴”と悪し様に罵った。緑川英子の親類もそのため巻き添えになった。

緑川英子は《中国の勝利は全アジアの明日への鍵》という文章で，こう答えた。“私を謀叛人と呼ぶなら，呼ばせておきましょう。私はすこしも恐れません。私はかえって，他人の領土を侵略するだけでなく，この世の地獄も生み出すあの人々が，私の同胞であることに，恥しさを感じます！”

武漢陥落後，緑川英子は重慶にやって来て，郭沫若の指導する抗敵文化工作委員会で働いた。国民党反動派は，抗日には消極的，反共には積極的な反人民の政策をとっていた。重慶には腐敗した敗北主義の空気が満ち溢れていた。この時期に，緑川英子は国民党反動派の正体を見抜き，勇敢に抗戦をつづける中国共産党と接触し，空をおおう深い霧の中から光明と希望を見い出していた。彼女は巨大な熱情をもって全世界人民が団結して起ち上がり，共同でファシストに反撃するようアピールし，人々を鼓舞した。彼

女はエスペラント語で数多くの戦闘的な文章を書いた。「全世界のエスペランティストに送る手紙」,「五月の首都で」,「代用品時代——戦時日本の風俗画」,「冬来たりなば，春遠からじ」,「日本の大学生の側面」,「彼女たちは闘いの中を前進する」などである。これらの文章は，あるものは重慶の『新華日報』や『群衆』半月刊に発表され，あるものは延安の『解放日報』に発表された。後にいずれも緑川英子の『嵐の中のささやき』に収められた。同時に，彼女は自伝体の作品『闘う中国で』を書き始め，中国における闘いの経歴を3部に分けて書く計画であった。惜しくも，第1部しか彼女は完成できなかった。

緊迫した闘いと苦難の生活から緑川英子は病いに倒れ，両頬の“リンゴのような赤味”が失われた。しかし，彼女は大変楽観的であった。日本の母親に書き送った手紙の中に“ごめんなさい，お母さん。あなたが下さった二つの赤いリンゴを，私はもう食べてしまいました”と書いている。又,『なくなった二つのリンゴ』という長詩も書いている。この詩の中で，彼女は炎のような激情でもって，全世界の平和を愛する人民のために最後まで闘う決心を表明している。

このころ，国際主義戦士緑川英子の名はすでに，国民党統治区や解放区の人民によく知られていた。1941年7月27日，重慶文化人のある会で，緑川英子は光栄にも周恩来同志に会った。周恩来は笑いながら緑川英子に向かって，“日本の軍国主義者はあなたのことを“嬌声売国奴„と呼んでいますが，本当はあなたは日本人民の忠実な善い娘です。本当の愛国者です”と言った。緑川英子はそれを聞くと大変感激し，こう答えた。“そうおっしゃって下さるのは私にとって最大の励ましです。私の取るに足らない仕事に対する最高のねぎらいです。私は中日両国人民の忠実な娘になりたいと思っています！”

1945年8月15日，緑川英子は中国人民とともに，抗戦の偉大な勝利を迎えた。何という喜びであったろう！

しかし，抗戦中8年間，峨嵋山に隠れていた蔣介石は，この時山を下りて抗戦勝利の成果を横取りしようとした。全国的な内戦が発動される中，中国人民の忠実な戦友，緑川英子は霧の都重慶を離れ，転々として東北の解放区へやって来た。彼女は中国共産党員とともに，解放区の兵士や民衆とともに，中国人民の解放闘争に身を投じた。

1947年1月14日,*中国人民と苦難をともにしてきた緑川英子は，人工流産の手術で病菌に感染し，不幸にも世を去った。わずか35歳の若い命を失ったのである。数ケ月後，夫劉仁も二人の幼な子を残して病死した。

× × ×

30年余りが過ぎ去った。緑川英子の残した二人の幼な子——兄劉星と妹劉暁蘭は，党と人民政府にはぐくまれて成長し，成人していた。二人はそれぞれ，北京大学と唐山鉄道学院を卒業し，現在はともに仕事についている。二人は長い長い間，日本にいる母の親戚を捜した。1977年8月15日，二人の手紙はついに日本の伯母と叔父——緑川英子の姉と弟の手に届いた。1978年8月18日，伯母の小沢由紀は日本の『中国報道』友好訪中団に従って北京を訪れ，甥と姪と親しく卓を囲んだ。一年後，劉星と劉暁蘭兄妹は母の祖国を訪れ，夢の中でも思いつづけた日本の旅を始めた。彼らの叔父は二人がこんなに大きく，りっぱに育った姿を見て，大変感激した。そして，二人が母の遺志を継いで，仕事の腕をみがき，日中友好のために貢献するよう励ました。

日本で最近撮影されたテレビ・ドラマ『望郷の星』は，緑川英子の事跡にもとづいて作られたものである。中日両国人民の忠実な娘緑川英子——長谷川テルは永遠に，中日両国人民の友好の歴史に名を留め，永遠に中日両国人民の心の中に生きつづけるであろう。

新華社記者　李徳潤　王立文

（写真）長谷川テルと夫劉仁。二人はかつてともに党の指導する『反攻』半月刊誌で仕事をし，1945年ともに東北解放区へ駆せ参じ，活動した。劉仁同志はすでに，1947年4月世を去っている。

（人民日報1980年5月7日号）

＊ 1947年1月10日が正しいという説もある。(利根光一「墓標なき烈士」世界82年10月号289ページ。)

彼女は祈中国の夜明けのために高らかに歌う——戦友緑川英子を偲ぶ

白浩　高凱　聶長林　孫漢超

希望の未来のために我々は流した血が海となるのも惜しまない，

五年の抗戦は中国解放の礎石を定め，

人民の平和の砦を築き上げた。

今日我々は胸を張って高らかに夜明けの賛歌を唱おう！

この高らかな歌声は来年の七回目の“七・七”に，

必ず侵略者の暮れ行く葬送曲に変わるだろう。

1942年7月7日，中国の抗戦がまさに極めて困難な状態にあった時，日本の女性作家，エスペランティスト，勇敢な国際主義戦士は，中国人民の親密な戦友緑川英子同志は，『夜明けの合唱』と題して，重慶『新華日報』にこの国際主義の激情に満ち溢れた意気盛んな詩篇を発表した。現在，緑川英子が我々のもとを去って，すでに三十三年になる。彼女はその眼で新中国の五星紅旗が天安門の前に初めて掲げられるのを見ることができなかった。しかし，彼女は確かに，自らの闘いによって新中国の“夜明けの合唱”に加わった，熱烈な堅強な歌い手だったのである。

緑川英子は1937年，中国革命に参加した。抗日戦争の苦しい全行程中，彼女は絶えず中国人民とともに闘い，苦しみをなめ，手を携えて中国の解放のため，人類の平和のために，夜明けの戦いの歌を高らかに唱いつづけた。不幸にも彼女が病気で世を去ってすでに三十年になるが，我々の哀悼の念は絶えることなく，心の奥から離れない。

1929年，緑川英子は日本の奈良で勉強していた時，左翼学生運動と“プロレタリア・エスペラント運動”に加わった。1932年，彼女は“共産党シンパ”という罪名で捕われて留置され，釈放後に学校を除籍された。1937年，彼女と結婚して一年にしかならない夫の中国人留学生劉砥方（すなわち劉仁）は，相前後して1月と4月に中国へ到着し，わが党の指導する抗日愛国闘争に積極的に参加した。

1938年8月，彼女は『新華日報』に発表したある文章の中で，こう述べている。“大変残念なことは，私の身体がひとつしかなく，手は二つしかないことだ。もしも私に百の身体があれば，前方の日本軍の中へ行き，もうこれ以上中国の兄弟を，中国の民衆を殺さないようにさせるだろう。もしも私に千本の腕があれば，あらゆる戦線に行って，中国兵の負傷した所に包帯を巻いてやり，服を洗ってやるだろう”

当時，緑川英子は武漢で対日放送の仕事を担当し，全力を尽して日本帝国主義が中国人民に犯した極悪非道の罪行を，世界に向かって暴露していた。まさにそのために，東京の『都新聞』は彼女を“女売国奴”とののしったのである。しかし，彼女はそれを鼻の先で笑っていた。彼女は，“中国の勝利は全アジア，そして，全人類の明日への鍵である”と固く信じていた。彼女はいつも真摯な感情を込めて言っていた。“私は日本を愛しています。私の両親と姉と弟と親類の人や友人など，懐しむに値する多くの人々が，生きていく頼りとしている祖国を愛しています。それと同時に，私は中国も愛しています。これほど多くの親密で勤勉な仲間に囲まれた私の第二の故郷を愛しています”彼女はこう言う。“私は憎みます。全身の力をふりしぼって，両国人民の殺し合いを強く憎みます”“私たちの唯一の敵はファシストです”彼女は中国人民にこう呼びかけた。“皆さんは情容赦もなく，頑強に攻めつづけて下さい！　私も後方であらゆる方法を用いて，抗戦を支援します”何という崇高な愛国主義と国際主義の精神であろうか！

我々が緑川英子同志と知り合ったのは，1944年の後半だった。当時，我々は重慶の“東北民衆抗日救亡総会”で，機関誌『反攻』半月刊の編集に携わっていた。“東北民衆抗日救亡総会”

はわが党の外部組織で，本部は重慶に設けられていた。会の指導者は高崇民同志たちであった。当時，『反攻』半月刊の編集主筆は，緑川英子の夫劉砥方であった。そして，我々はこの時期に，彼ら夫妻と深い戦闘的な友情を結んだのである。

初め，緑川英子が我々に与えた印象は優しく，落ち着いた，しとやかなものだった。明るい鏡にも似た湖水のように，静かで波ひとつない。しかし，しばらくともに暮して，我々は発見した。彼女は性格のほがらかな，思慮深い，人生や社会に対して透徹した認識をもっている女性作家であるだけでなく，政治的にもはっきりした信念をもった，意志の強固なプロレタリア戦士だったことを。当時，『反攻』半月刊社の近くには，国民党特務が秘密のアジトを設けていた。我々はつねに国民党特務の監視のもとにあったのだが，緑川はいつも泰然と構えていた。そのころ，我々は経済的にも極めて困難な状態にあり，抗日に熱心な一部の同志たちの援助を受けるほかには，ほとんど何も固定した収入源がなかった。我々は給料もなく，原稿料も取らない，無報酬の編集者であった。ところが緑川英子はいつも，我々とともにいることを大変喜び，ともに苦しみを分かちあい，長い間，皆と同じテーブルで，繊維分の多いヨウサイや砂利だらけの“平価米”を食べていた。ときたま，閻宝航，陳先舟，杜宏如などの指導者たちが順番で，我々を町に“歯のお祭り”に招いてくれる。そういう日にはいつも，緑川は大喜びで息子の劉星を我々の背中におぶらせて，山を下り，川を渡り，往復数十里の道のりを歩いていったが，疲れも感じないようだった。そのころ，我々は緑川夫妻とともに生活し，一緒に闘い，いつも生気はつらつとして歓びに満ち溢れていた。

緑川同志は大変勤勉な女性作家であった。彼女は仕事でも，勉強でも，又，執筆でもいっそう勤勉であった。『反攻』半月刊の編集室で，彼女はいつもたゆまず筆をとった。劉星がたまに邪魔をして，ちょっと書く手を休めざるをえない時を除いて，ほとんど一刻も休まなかった。『戦う中国で』の第1部は，この時期に書き上げられ，1945年から『反攻』に連載されはじめた。この本は，我々のこの多難な雑誌を極めて大きな力で支えてくれ，この多難な雑誌にいっそうの輝きを添えてくれた。

当時の重慶は，国民党反動派の残忍な統治のもとにあり，暗澹たる状態であった。緑川はそれを，“深い霧が太陽をさえぎっている”時期と呼んでいる。しかし，彼女は中国共産党に対してあふれんばかりの熱い思いを胸に秘め，限りない心を寄せていた。彼女は本の中でこう書いている。“私たちは暗黒の中に光明を見い出さねばなりません。依然として，新しい闘いが延安に指揮されて全国各地で進められています彼女はこう述べている。“私はあふれんばかりの喜びと誇りをもってこう言えます。中国人民は決して暴力の前に屈服はしません”，“私が中国にやって来たのは，血に染まった大地の上に立ったのです。しかし，私は信じています。極東のこの片隅で，必ず，ファシストに反対する闘いを最後の勝利を手にするまでつづけるでしょう”。彼女は又，いつも詩人のシェリーの有名な言葉を引用して，我々を励ました。“冬来たりなば，春遠からじ”

郭沫若同志はこの強靱な国際主義戦士を，大変尊敬していた。1941年，彼は自ら緑川英子同志のために，70センチ四方ほどの赤い絹布に熱情をこめた詩を書いた。郭老はその詩の中で，中国共産党の指導を熱烈に称え，緑川同志が暗黒の中に明るい革命の前途を見い出さねばならないと指し示しただけでなく，緑川英子同志にも大きな称賛を寄せている。緑川英子同志は郭老の題詩を非常に大切にし，何度も苦境に陥り流浪いつづけても，いつも肌身離さず携え，傷つけることもなく守り通した。

中国人民と手を携えて8年の抗戦を貫いた緑川英子は，日本侵略者の無条件降伏という知らせを聞いて，言い表わせぬ喜びを味わった。1945年8月15日，日本が降伏を宣したその日の晩はわが『反攻』編集部の狂喜の夜であった。緑川は我々とともに通りへ出ると，松明行列に加わった。歓喜の果てに，我々は一様にこう思った。中国はすでに新しい段階に入った。我々又，二つの運命，二つの未来の大決戦に身を

投ずるのだ。しかし，緑川英子同志は我々と同じ理想を抱いていただけでなく，彼女の祖国にも思いを寄せていた——日本はどこに行くのだろうか？　彼女は「祖国を離れてもう8年になりました。なつかしさが今ほどつのることはありません。けれど，私たちは平和な日本が欲しいのです。民主日本が必要なのです」と言った。数日後，高崇民同志が周恩来同志の指示を伝えて，東北出身の幹部はただちに東北へ帰り内戦反対工作を展開するよう要求してきた。そこで決定した。我々青年幹部は先に，重慶を離れる。緑川夫妻はしばらく重慶に留まり，『反攻』半月刊を9月18日まで刊行して停刊し，それから北上する，と。

我々が武漢に到着したのは，すでに9月中旬であった。当時，国民党反動派は積極的に内戦の準備をし，海・陸・空の交通手段をすっかり押さえており，我々は閉じ込められてしまった。1945年11月，緑川夫妻も劉星をつれて武漢に到着した。そこで，我々は一緒に北上する手段を講じた。1946年1月になって，ようやくあらゆる準備が整った。ところが，思いがけず，我々が変装して出発しようとしていた晩，突然，4歳の劉星が行方不明になった。それは緑川夫妻に大きな打撃を与えただけでなく，我々叔父さんたちの心をも，火のついたような思いにした。しかし，緑川英子は極めて冷静な態度を見せ，あわてふためいて度を失うような所は全くなかった。我々は，これが国民党の圧迫だと気づき，ともに国民党反動派に対する闘争戦術を研究した。それはちょうど“重慶交渉”の直後で，“双十協定”が調印されて間もない時であった。我々はその雰囲気を利用し，八方手を尽して救い出そうとした。緑川同志も勇敢に自ら漢口警察局へ行き，警察局長に会って事件を知らせ，筋を通した交渉をした。こうして，国・共両党が“停戦協定”に調印した1月10日の夜，国民党特務はこっそりと劉星を釈放して返した。そこで，翌日の夜，我々は極秘に船に乗り，南京を経て上海へ行き，船で北上する機会を待った。最後に，招商局顧問で進歩的な人物であった金月石の援助により，招商局が国民党の軍隊を北に運ぶ汽船に乗船できた。船長も共産党のシンパで，我々を秘密に船尾の狭い雑用品倉庫にかくまってくれた。倉庫の中には様々なガラクタが詰め込まれ，空気は汚れており，昼も夜も小さなローソクをつけて灯りにしなければならなかった。毎日3食とも冷たく硬くなった年糕〔中国の正月用モチ〕をかじった。緑川英子は皆と同じように，中に閉じ込もっていた。およそ2週間余りたってから，船はようやく呉淞口を出航し，秦皇島へ向かった。緑川と我々はようやく安心し，1メートル四方の小さな倉庫の入口からはい出て，甲板に上り，むさぼるように新鮮な空気を吸った。その時，緑川は甲板の上に立ち，限りない感慨をこめて，こう言った。“8年前は，この涯しない大海原が，祖国と親しい友から私を引き離し，新しい生活へ導いてくれたのです。今日は又，この涯しない大海原が私を旧世界から引き離して光明の向こう岸へと導いてくれるのです！”

船が秦皇島に着くと，我々は列車に乗り換え，1946年2月，瀋陽に到着した。当時，瀋陽はなおソ連軍の支配のもとにあったが，すでに国民党反動派が接収を始め，特務が横行して白色テロが猖獗を極めていた。ある夜遅く，我々は砥方と緑川同志の仮住いに集合し，方法を相談した。この時，高崇民同志がすでに東北局に到着した。ちょうど本渓解放区にいることがわかった。そこで，我々はただちに本渓へ行くことにした。やはり，我々数人の若い者が先に出発し，緑川は二番目の子ども暁蘭がお腹にいたので，しばらく瀋陽に留まって待つことになった。しかし，我々が本渓へ行って任務の指示を仰ぎ，瀋陽に引き返そうとした時，瀋陽郊外ではすでに戦闘が始まり，交通が杜絶していたため，瀋陽に返るのは不可能だった。それから，我々と緑川夫妻の連絡は途絶え，それぞれ別々に違った持ち場で新しい闘いの生活に入いった。

のちに我々は，緑川同志夫妻が1946年冬，国民党反動派の厳重な封鎖を破って瀋陽を離れ，解放区ハルピンへ到着したことを知った。1947年1月，東北行政委員会第13次会議の決定により，夫妻は東北社会調査研究所研究員に任命さ

れた。その後，国民党が進攻したが，緑川夫妻は手元に二人の子どもがおり，しかも瀋陽で生まれた娘の暁蘭はまだ一歳にもなっていなかったので，彼らの安全をはかるため，一家を佳木斯に撤退させた。しかし，不幸なことに，緑川があふれんばかりの政治的な熱情と革命的な激情を抱いて中国人民の解放事業に献身していたその時，思いがけず人工流産の手術で病菌に感染し，治療の効もなく世を去ってしまった。その時，彼女はわずかに35歳であった。3カ月後，劉砥方同志も病気のため世を去った。佳木斯の党組織と人民大衆は，この英雄的な国際主義戦士を記念するため，夫妻を佳木斯烈士公墓に埋葬した。

全国解放後，とりわけ新中国の成立したその日に，皆が一堂に会して建国を祝って喜ぶ時，緑川夫妻に対する我々の懐しさは倍になる。高崇民同志は強く感慨を込めて，こう言う。“緑川英子がもしも生きていたら，どんなによかっただろう！　彼女は新中国の建設に，中日友好事業の発展に，より大きな貢献をなしたであろうに”1952年春，高崇民同志は中央の代表団を率いて佳木斯一帯の中国人民志願軍の負傷兵を慰問した時，わざわざ墓地へ赴き，地下に永眠する戦友——緑川と砥方同志を偲んだ。

33年が過ぎ去った。春になるたびに，我々はいつも，緑川英子と劉砥方同志の墓の草は，どんなに深くなったことだろうと思いを到す。中国人民は緑川英子というこの，中国人民の解放のために，人類の平和のために高らかに夜明けの賛歌を唱った国際主義戦士を忘れることはないであろう。緑川英子という名前は，我々のすべての革命の先駆者と同様に，永遠に中国人民の心の中に生きつづける。

（人民日報　1980年5月26日）